

英藏敦煌文獻から発見された禪籍について —S6980 以降を中心に— (1)

程 正

一、S6980 以降の敦煌遺書について

敦煌遺書（敦煌文書、敦煌文獻とも）とは、1900年、古來中國と西域諸國を結ぶシルクロードに位置する交通の要衝であったオアシス都市敦煌（現、甘肅省敦煌市）にある莫高窟の藏經洞（現、17號窟）と呼ばれる密室から発見された5萬點以上にも及ぶ古文書のことである。

1907年5月にハンガリー人で後にイギリスに歸化したオーレル・スタイン（Aurel Stein）が莫高窟を訪れ、敦煌遺書の発見者である道士王圓籙からその一部を入手しイギリスに持ち去ったのである。これらの敦煌遺書は、當初大英博物館に保管されていたが、1973年7月に、大英博物館の改組により、大英圖書館に移管されるようになり、將來者の名にちなんでスタイン・コレクションと呼ばれ、ペリオ・コレクション（フランス）、北京・コレクション（中國）、オルデンプルク・コレクション（ロシア）と合わせ、敦煌遺書の四大コレクションと稱されている。

スタイン・コレクションの目録については、まず Lionel Giles（ライオネル・ジャイルズ）氏が *Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhuang in the British Museum, The Trustees of the British Museum, London, 1957*（以下『ジャイルズ目録』）を出版し、當時資料整理のできた S6980 までの目録を公表されたのである。ところが、その後の英藏敦煌遺書の資料整理が長足の進展を遂げてきたにもかかわらず、その目録の制作と公表が著しく遅れた。1994年、榮新江氏が『英國圖書館藏敦煌漢文非佛教文獻殘卷目録（S.6981-S.13624）』（臺

1 大英博物館に保管されていたのは、スタイン將來の敦煌遺書に含まれる漢文文獻のみで、漢文以外の言語で書寫された文獻、いわゆる胡語文獻は、當時インド省圖書館に保管されていた。

灣・新文豊出版、以下『榮目』)と題する目録を發表された。S6980 までを収録する『ジャイルズ目録』の最初の後續目録という意味において、『榮目』は重要であるが、その書名にある「非佛教文獻」というキーワードでもうかがえるように、あくまで佛教文獻以外のものを対象としたために、實際収録した敦煌遺書がわずか 500 點前後で、この値を S6981 ~ S13624 という範囲で考えると、その全體の 10% にも満たないもので、完全な目録とは言い難いものである。一方、方廣鉛氏が『英國圖書館藏敦煌遺書目録 (斯 6981 號—8400 號)』(北京・宗教文化出版社、2000、以下『方・英藏目録』)と題する目録を出版された。前述の『榮目』と異なり、『方・英藏目録』は逐號に著録したもので、『ジャイルズ目録』に後續する最初の完全目録として高い評價を博した一方、S8400 以降の目録が含まれていないことが惜まれる。その後、14 冊からなる巨大シリーズ『英藏敦煌文獻 (漢文佛經以外部分)』(成都・四川人民出版社、1990 ~ 1995、以下『英藏敦煌』)の完結巻 (第 15 巻)として、楊寶玉主編の『英藏漢文佛經以外敦煌文獻目録索引』(成都・四川人民出版社、以下『楊目』)が 2010 年 4 月に刊行された。『楊目』は『英藏敦煌』シリーズの目録と索引の両方の機能を兼ね備え、しかも 1990 年代以降の研究成果を踏まえて、シリーズ刊行當初にみられた一部の誤植などを含むミスにも修正を施したもので、その収録範囲も、名目上 S10 ~ S13650 としている。但し、やはり「漢文佛經以外」というふうに敦煌遺書を區分けているため、スタイン・コレクションの敦煌遺書の完全目録には到底なり得ないものである。

こうして、かつては『ジャイルズ目録』によって S6980 までの詳細が知られたスタイン・コレクションの敦煌遺書であるが、上述の各種目録と影印版の刊行によって、S6980 以降にも約 7,000 點ほどのものがあり、そしてその一部の内容が知られるにいたった現在、スタイン・コレクションの全貌がうかがえる影印版の刊行とそれに基づく完全な目録の作成が待望される。この期待に應えるべく努力は、方廣鉛氏が率いる敦煌遺書の研究者グループによってなされている最中である。すなわち、方氏の主編する影印版シリーズ『英國國家圖書館藏敦煌遺書』(桂林・廣西師範大學出版社、2011 ~)が第 1 ~ 40 巻 (S2433 迄) 刊行され、文書番號順にすべての影印が、また各巻の巻末にその巻に収録された敦煌遺書の詳細な條記目録がそれぞれ公にされている。そしてこのようなかたちで、およそ 14,000 點にもものぼるスタイン・コレクションの敦煌遺書のすべてを刊行し終えてから、各巻末に配されている條記目録を統合し、『英

『國國家圖書館藏漢文敦煌遺書總目錄』(假稱)にまとめるという壮大な構想が計畫されている。一步づつ着実に歩みを進めているとはいえ、計畫通り完遂させるには、なおかなりの歳月が必要であろう。その恩恵を被る者の一人として、一日でも早い完結を切に願っている。

ところで、筆者は長い間敦煌遺書に存する初期禪宗文獻、いわゆる敦煌禪宗文獻に惹かれ、世界各地に保管されている敦煌禪宗文獻の目録製作に取り組んできた。その研究成果をとりまとめ発表したのが拙著『敦煌禪宗文獻分類目録』(大東出版社、2014、以下『分類目録』)である。ただ、「目録」類の研究成果は、最新の學術情報や成果などを常に追加し、更新していかなければならないという宿命を背負うものなのである。また S6980 以降に含まれる敦煌禪宗文獻については、拙著執筆当初、ごく一部の先學によって紹介されたものを除き、有効な確認手段を缺く中で、その詳細を確認できず、ほとんど採り入れることができなかつたのである。

一方、筆者は勝縁に恵まれ、2016年4月から1年間上海師範大學の教授である方廣鎬氏のもとで在外研究を行うことができた。方氏のご指導を賜りながら、その指揮の下で前述したスタイン・コレクションの敦煌遺書に關する壮大なプロジェクトが展開されていることを目の当たりにし、これまでほとんど接し得なかつた S6980 以降の敦煌遺書に對する認識を一氣に深めることができたのである。そこで、S6980 以降の敦煌遺書の寫眞を1枚ずつ確認しながら、その中に存する禪宗文獻を洗い出すことにした。拙稿はその成果を報告するためにまとめたものである。なお、最終的には、今回の内容を前述の拙著である『分類目録』と統合していくことを考え、論を進めるに當たって、禪宗文獻の分類をはじめ、すべてのスタイルを拙著に準ずるものとするを、また、『分類目録』においてすでに個別に紹介した S6980 以降のものも、論題との整合性を考慮し、簡単に觸れておくことを、予めお断りしておく。

二、S6980 以降の敦煌遺書から発見された禪宗文獻

1、壇法儀則 (S8758、S9407、S11968 の3種)

『壇法儀則』は、敦煌遺書にしか存しないもので、『金剛峻經金剛頂一切如來深妙祕密金剛界大三昧耶修行四十二種壇法經作用威儀法則 大毘盧遮那佛金剛心地法門祕法戒壇法儀則』という長い題名を有する長文の密教文獻の略稱である。その一方、禪宗史研究の領域においては、これを燈史類禪宗文獻として取

り扱っている。すなわち、『壇法儀則』の巻末に付された「付法藏品部第三十五」という章節において、すでに存在した数種の禪宗傳燈説を巧みに取り込んで、それに密教的な改変を加えたからである。

S6980以降のスタイン・コレクションには、『壇法儀則』の残巻としてS8758、S9407、S11968の3種の存在が指摘されている。まずS8758は横22.8cm×縦13.1cmの罫入りの2紙を貼り合わせた残片で、天頭は辛うじて有するものの、下半部を完全に失っている。読み取れる内容は約15行にわたり、田中良昭氏の『敦煌禪宗文獻の研究』（大東出版社、1983→2009）に収録される『壇法儀則』の校訂本（以下、田中校訂本）の152頁下段1行目の「誕滅…」から、153頁下段6行目の「富那」までに相當するものである。次にS9407は横24.1cm×縦16.7cmの罫入り1紙の上半部のみの残片で、田中校訂本の157頁下段2行目の「行化…」から、159頁下段1行目の「是姑□」までの内容に相當するものであり、S8758と同筆ではあるものの、両者は直接には接續しない。續いてS11968は横79.2cm×縦25.7cmの罫入りの3紙を貼り合わせた下半部のみの斷簡で、田中校訂本の152頁下段4行目の「年丙…」から、159頁下段1行目から2行目の「母佛」までの内容に相當するものである。なおこの3種はいずれも『分類目録』で言及されたものであるため、詳細な紹介はそれに譲りたい。²

2、傳法寶紀 (S10484 の1種)

淨覺の『楞伽師資記』と並んで、最初期の北宗禪の燈史として知られる杜朮撰『傳法寶紀』は、敦煌遺書にのみ存する貴重な初期禪宗文獻である。東山法門の五祖弘忍の後繼者として第六代目に擧げられたのが、北宗の祖とされる大通神秀ではなく、その兄弟弟子の嵩山法如であり、また神秀をその後に配置していることこそ、『傳法寶紀』の主張する傳燈系譜の特色なのである。そして、同じく敦煌禪宗文獻の『七祖法寶記』、『歴代法寶記』など、いわゆる「法寶

2 『分類目録』では『壇法儀則』の寫本として計15種の敦煌遺書を紹介している（18～21頁）。すなわち、① S2144V、② S2316V、③ S5981、④ S8758、⑤ S9407、⑥ S11968、⑦ P2791、⑧ P3212、⑨ P3913、⑩ BD2074（冬74、北7667）、⑪ BD2301V（餘1、北1388）、⑫ BD2431V（成31、北3699）、⑬ BD6329V（鹹29、北3554）、⑭ BD15147（新1347）、⑮ 甘博15の15種である。

記」系の禪宗文獻の先驅けとしても注目されている。³

現在、『傳法寶紀』のテキストとして4種が知られ、そのうちの1種がS6980以降のスタイン・コレクションに含まれるS10484である。これについては、すでに『分類目録』で言及しており、詳細な紹介はそれに譲りたい。⁴

3、菩提達摩南宗定是非論 (S7907 の1種)

『菩提達摩南宗定是非論』(以下『定是非論』)は、やがて禪宗六祖の地位を手にした曹溪慧能の弟子である荷澤神會が北宗禪の祖統説、禪法思想などを悉く論破した法論の記録であり、南北兩宗分派に際して一方の當事者である南宗(荷澤宗)の主張が濃密に盛り込まれた貴重な初期禪宗文獻である。嚴密に言えば、南宗禪の思想を克明に傳えている『定是非論』を初期禪宗語録、いわゆる語録類の文獻として取り扱うことも可能であるが、大通神秀を五祖弘忍の後繼者とする北宗の祖統説に對抗し、曹溪慧能を六祖と位置づける南宗の傳法系譜を明確にしたことが注目され、『分類目録』ではこれを語録類とせず、敢えて燈史類に入れることにしたのである。

『定是非論』は、開元20年(732)正月15日に滑臺大雲寺で行われた無遮大會において、慧能の弟子である神會が、師の慧能を菩提達摩南宗の六祖と主張し、北宗の代辯者である崇遠法師を相手に、北宗の祖統説や禪法思想などを厳しく批判した法論の内容を、神會の俗弟子とされる獨孤沛がのちにまとめたものである。

現在、知られている5種の『定是非論』の寫本のなか、S6980以降のスタイン・コレクションに含まれるものが1種あり、それはS7907である。これについては、すでに『分類目録』で言及しており、詳細な紹介はそれに譲ることにするが、⁵『方・英藏目録』によってその書誌學的情報のみを記しておこう。S7907は首尾ともに缺く横22.5cm×縦12cmの殘片で、凡そ15行ほどの文字

3 拙論『『七祖法寶記』に關する一考察—特にその成立について—』(『駒澤大學大學院佛教學研究會年報』37、2004、17-31頁)。

4 『分類目録』では『傳法寶紀』の寫本として計4種の敦煌遺書を紹介している(22～25頁)。すなわち、①S10484、②P2634、③P3559、④P3858の4種である。

5 『分類目録』では『定是非論』の寫本として計5種の敦煌遺書を紹介している(27～31頁)。すなわち、①S7907、②P2045、③P3047、④P3488、⑤敦博77(任子宜氏舊藏本)の5種である。

が残されているという。⁶

その内容は、楊曾文校訂本⁷の17頁第4行にある「修未成言…」から18頁第4行の「帝凡情不了達摩」までのものに相當する。

4、歴代法寶記 (S11014 の1種)

『歴代法寶記』は、初期禪宗の一派である淨衆・保唐宗の燈史として知られ、敦煌遺書とトルファン文書にしか存しない貴重なものである。8世紀後半、禪宗の構圖では、北宗から南宗へという勢力の消長が顕著に現れるようになった中、四川の地を中心に禪宗の第三勢力として力を持ち始めたのが、淨衆寺と保唐寺を中心に活躍した禪僧らのグループである。新たに登場してきた淨衆・保唐宗の人びとは、非北宗、非南宗（荷澤宗）、いわゆる第三勢力としての立場を強くアピールするために、神會が提唱した傳衣説（傳法に際し、信しとして初祖達摩より代々相承されてきた袈裟を授けるという傳統）を巧みに利用しつつ、時の天子である則天武后を媒介させ、その袈裟を淨衆宗の祖で、北宗神秀、南宗慧能の兄弟弟子の一人である資州智詵を達摩の正系の傳承者に仕上げるなど、南宗への流れを自派へと引き寄せようとする様々な補強策を施したのである。また、西天（インド）の祖統説として、現存する禪宗各派の燈史の中で、初めて西天二十九祖説を主張したのも『歴代法寶記』の特色なのである。

現在、『歴代法寶記』のテキストとしてトルファン文書の1種を含め、計13種が知られ、そのうちの1種がS6980以降のスタイン・コレクションに含まれるS11014である。これについては、すでに『分類目録』で言及しており、詳細な紹介はそれに譲りたい。⁸

6 『方・英藏目録』、250頁。但し、『方・英藏目録』ではS7850を『眞宗論』ではなく『大乘起世論』の異本と比定されているが、この問題については、拙論「『大乘開心顯性頓悟眞宗論』の依據文獻について—特に『大乘起世論』との關連を中心に」（『駒澤大學佛教學部研究紀要』69、2011、125頁）を参照されたい。

7 楊曾文編校『神會和尚禪話録』（中國佛敎典籍選刊）北京・中華書局、1996、2004、17～18頁）。

8 『分類目録』では『歴代法寶記』の寫本として12種の敦煌遺書、1種のトルファン文書、計13種を紹介している（37～41頁）。すなわち、①S516、②S1611、③S1776V、④S5916、⑤S11014、⑥P2125、⑦P3717、⑧P3727V、⑨Φ261、⑩石井光雄氏舊藏本、⑪津藝103V、⑫津藝304V、⑬Ch3934rVの13種である。

5、絶観論⁹ (S12208、S12370 の 2 種)

『絶観論』は、入理先生と弟子縁門による対話形式を用いつつ、読者を「絶観」の境地へと誘う長篇の初期禪宗語録で、やはり敦煌禪宗文獻の「語録類」に分類されている『無心論』と、形式的にも内容的にも共に極めて密接な関係にあるとされている。敦煌遺書とトルファン文書にしか存しない『絶観論』の寫本に記されている題名には、「入理縁門一卷」(P2885 首題)、「達摩和尚絶観論一卷」(同尾題)、「菩薩心境相融一合論」(P2074 首題の別名)、「絶観論一卷」(P2732 首題)などといったような多彩なバリエーションがみられることから、敦煌遺書より発見された當初より、その撰者問題が、研究者の注目を集めてきたのである。すなわち、久野芳隆¹⁰、宇井伯壽¹¹、關口眞大¹²らの諸氏は『絶観論』の撰者を、初期禪宗の一派である牛頭宗の派祖——牛頭法融に比定しているのに対し、鈴木大拙¹³、中川孝¹⁴の兩氏は、その撰者が菩提達摩であると主張された。その後、柳田聖山氏の精力的研究¹⁵によって、『絶観論』の牛

-
- 9 『分類目録』では『絶観論』の寫本として 12 種の敦煌遺書、1 種のトルファン文書、計 13 種を紹介している (72～78 頁)。すなわち、① P2045、② P2074、③ P2732、④ P2885、⑤ BD2284-1 (閏 84、北 8384)、⑥ BD9790 (朝 11)、⑦ BD11564 (臨 1693)、⑧ 石井光雄氏舊藏本、⑨ Dx4259、⑩ Dx5881、⑪ Dx6230、⑫ Dx8768、⑬ Ch1433 の 13 種である。
- 10 久野芳隆「流動性に富む唐代の禪宗典籍—燉煌出土本に於ける南禪北宗の代表的作品—」(『宗教研究』新 14-1、1937、117～144 頁)、同「牛頭法融に及ぼせる三論宗の影響—燉煌出土本を中心として」(『佛教研究』3-6、1939、51～88 頁)。
- 11 宇井伯壽「法融の弟子及び著述」(同氏『禪宗史研究』岩波書店、1939、1990、117～118 頁)。
- 12 關口慈光(眞大)「絶観論(敦煌出土)撰者考」(『大正大學學報』30、31 合輯、1940、179～187 頁)、同「燉煌出土「絶観論」小考—牛頭禪研究の新資料として」(『天台宗教學研究所報』1、1951、71～77 頁)、同「達摩和尚絶観論(燉煌出土)は牛頭法融の撰述たるを論ず」(『印度學佛教學研究』5-1、1957、208-211 頁)、同「達摩和尚絶観論」と牛頭禪」(同氏『達摩大師の研究』彰國社、1957→春秋社、1969、82～185 頁)。
- 13 鈴木大拙「敦煌出土達摩和尚絶観論につきて」(『佛教研究』1-1、1937、52～68 頁)、同氏編・古田紹欽校「燉煌出土積翠軒本絶観論解題」(『燉煌出土積翠軒本絶観論』弘文堂書房、1945、1～7 頁)。
- 14 中川孝「絶観論を中心として見たる初期禪宗史の問題點」(『東北藥科大學紀要』5、1958、73～81 頁)、同「絶観論考」(『印度學佛教學研究』7-2、1959、221～224 頁)。
- 15 柳田聖山「牛頭禪の思想」(『印度學佛教學研究』16-1、1967、16～23 頁)→柳田聖

頭宗の禪思想を伝える綱要書としての位置づけが定着したのである。さらに、田中良昭氏は、牛頭宗の思想綱要書として『絶観論』が作成された後、語録としての権威付けのために、「達摩和尚絶観論」と冠名されたが、禪宗各派の完全確立と共に牛頭宗の派祖である法融のものと思われるようになったと推定された。¹⁶これに對して、伊吹敦氏が田中説と正反對の假説を提起された。すなわち、牛頭宗の綱要書である『絶観論』は、その派祖である牛頭法融の作品にされていたが、牛頭宗の衰退により、達摩に假託されるようになったというのである。¹⁷

『絶観論』の寫本については、『分類目録』においてドイツ・ベルリンに所蔵するトルファン文書の1種を含め、計13種をすでに紹介している。今回の調査によって、S6980以降のスタイン・コレクションには、いずれも斷簡ではあるが、『絶観論』の寫本として新たに2種の存在が確認されたのである。すなわち、S12208とS12370の2種で、両者がいずれも『絶観論』巻首の内容を有しており、しかもこのまま連結可能な斷簡である。

かつて柳田聖山氏が、當時出現した6種の異本すべてを詳細に比較校合し、これら6種の異本に3段階の發展があったとする新説を出された。それによれば、「入理縁門一卷」を首題とするP2732、石井光雄氏舊藏本を第1段階、首題に達摩の名を付し、尾題を「觀行法爲有縁無名上士集」とするP2045、BD2284-1(閏84、北8384)を第2段階、「絶観論」の首題の下に「菩薩心境相融一合論」の別名を加え、尾題を「達摩和尚絶観論」とするP2074、P2885を第3段階として、これら3系統の本文を對照し、新たな資料提供をされた。ただ、今回新たに出現したS12208とS12307の2種は、いずれも斷片に過ぎないため、柳田氏のいう3タイプのいずれに当たるかについては、にわかには斷じ難いが、残された少ない文字を手がかりに比定すれば、おそらくその第3タイプ、つまり、P2074、P2885の系統に最も近いものであろう。

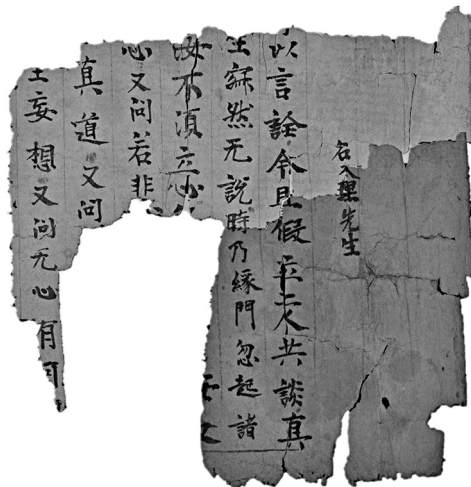
山『禪佛教の研究』(柳田聖山集 第1巻)(法藏館、1999、175-187頁)(以下〈柳田〉1)、同「絶観論の本文研究」(『禪學研究』58、1970、65～124頁)→〈柳田〉1(77～133頁)、同「絶観論とその時代—敦煌の禪文獻—」(『東方學報』52、1980、367～401頁)→〈柳田〉1(134～174頁)。

16 田中良昭「初期禪宗における絶観・無心・無念の系譜」(『平井俊榮博士古稀記念論集 三論教學と佛教諸思想』春秋社、2000、389～408頁)→同氏『敦煌禪宗文獻の研究』第2(大東出版社、2009、383～402頁)。

17 伊吹敦『禪の歴史』(法藏館、2001、49頁)。

IDP (International Dun Huang 〈敦煌〉 Project) の紹介によれば、S12208 は横 12.5cm × 縦 11cm の残片であるのに對し、S12370 は横 7.3cm × 縦 9.6cm の残片であるという。また IDP で公開されているカラー寫眞に基づいて述べれば、兩者は罫入りの紙にそれぞれ 7 行、3 行の内容を書寫している斷簡で、本文には朱筆による記號が施されている。筆者は兩者の筆跡、内容、そして紙の缺け具合などからして、S12370 がちょうど S12208 の右下に缺けた部分に相當するものと判断したのである。すなわち、兩者をこのままの状態で結合して復元することが可能なのである。兩者の内容を示せば、以下の通りである。

S12208	S12370
<input type="checkbox"/> … <input type="checkbox"/>	名入理先生
<input type="checkbox"/> … <input type="checkbox"/> 以言詮今且	假立二人共談真
<input type="checkbox"/> … <input type="checkbox"/> 生寂然無說時	乃緣門忽起請
<input type="checkbox"/> … <input type="checkbox"/> 汝不須立心	<input type="checkbox"/> … <input type="checkbox"/> [安又]
<input type="checkbox"/> … <input type="checkbox"/> 心又問若非	<input type="checkbox"/> … <input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/> … <input type="checkbox"/> 眞道又問	<input type="checkbox"/> … <input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/> … <input type="checkbox"/> 生妄想又問無心有何	<input type="checkbox"/> … <input type="checkbox"/>



S11208 (上) + S12370 (右下) による復元

6、大乘開心顯性頓悟眞宗論¹⁸ (S7850、S9211 の 2 種)

『大乘開心顯性頓悟眞宗論』(以下『眞宗論』)は、「南頓北漸」という圖式で考えられてきた北宗禪にも頓悟思想が存在したことを示す北宗禪の語録として、『頓悟眞宗金剛般若修行達彼岸法門修行要決』(以下『要決』)とともに発見當初から研究者の注目を集めた一方、最近、新出の敦煌禪宗文獻である『大乘起世論』との密接な關連性¹⁹も指摘されるなど、その重要性が一層高まった貴重なものである。

これまでには、『眞宗論』のテキストとして4種の存在が知られ、そのうちの1種であるS7850がまさにS6980以降のスタイン・コレクションに含まれるものである。『方・英藏目録』に基づいてS7850の書誌學的情報を紹介しておこう。首尾ともに欠き、3紙からなる横75cm×縦29.1cmの斷簡で、1紙22行で合わせて40行、1行約19字であるという。²⁰

ところで、筆者は今回の調査を通じ、S6980以降のスタイン・コレクションから新たに『眞宗論』の異本1種を見いだしたのである。すなわち、S9211のことである。IDPの紹介によれば、S9211は横16.4cm×縦22.4cmの斷簡であるという。またIDPで公開されているカラー寫眞に基づいて述べれば、S9211は罫入りの2紙を貼り合わせたもので、第1紙は天頭、地脚をともに欠き、辛うじて3行ほど『眞宗論』序文の一部を残し、およそT85-1278a22～28に相當するのに対し、第2紙は天頭のみを欠き、『眞宗論』本文の冒頭に當たる4行の内容が書寫されており、およそT85-1278b14～24に相當している。不思議なことに、2紙の貼り合わせ部分に約4行ほどの餘白が存しており、2紙の内容もそのままでは連結できない。

7、大乘五方便北宗〔大乘無生方便門、北宗五方便門、通一切經要義集、諸經要鈔〕²¹ (S7961A の 1 種)

『大乘五方便北宗』(以下『大乘五方便』)は『大乘起信論』、『法華經』、『維

18 『分類目録』では『眞宗論』の寫本として4種の敦煌遺書を紹介している(84～91頁)。すなわち、①S4286、②S7850、③P2162、④BD9690(坐11)の4種である。

19 『分類目録』、91～94頁。

20 『方・英藏目録』ではS7850の録文が紹介されている(233～234頁)。

21 『分類目録』では『大乘五方便』の寫本として9種の敦煌遺書を紹介している(94～101頁)。すなわち、①S4286、②S7850、③P2162、④BD9690(坐11)、⑤S7961、⑥P2058、⑦P2270、⑧P2836、⑨BD3924V(生24、北1351)の9種である。

『摩經』、『思益經』、『華嚴經』の一論四經に基きつつ、問答體で北宗禪の禪法思想を5項目にわたって詳述した長篇の北宗禪綱要書である。「大乘無生方便門」、「北宗五方便門」、「通一切經要義集」、「諸經要鈔」といったようなさまざまな異名を持つ『大乘五方便』は、その異名の多さからでも窺えるように、諸寫本で對校できないほど内容の異同が顯著に現れている。

『大乘五方便』に關する最近の研究成果として、次の2種の論文が注目されている。

伊吹敦 「『大乘五方便』の成立と展開」(『東洋學論叢』37、2012、1-62頁)

黄青萍 「關於北宗禪的研究—五方便門寫本及其禪法」(『敦煌學』32、2016、171-196頁)

まず、伊吹敦氏は發表された「『大乘五方便』の成立と展開」と題する論文において、『大乘五方便』の思想内容を検討するに当たり、はじめに、

- a. 異名にはどのようなものがあり、それら相互の關係はいかなるものか。
- b. 原本の撰者は誰か、あるいは、その思想は誰に由來するか。
- c. 文獻そのものの性格、あるいは、テキストが流動性に富む理由をどう考えるか。

の3つの問題を解決すべきであるとして、これらの問題意識に基づいて先行研究を紹介した上で、敦煌寫本や傳世の金石文などを材料にして『大乘五方便』に關する論考を行った結果、その成立には、3つの段階があると指摘された。すなわち、

第一段階 (八世紀前半)

「大乘五方便」は、當初、普寂の影響下に「開法」の模範を示す「臺本」として編輯された。その内容は、東山法門以來の傳統を承け繼いで「授菩薩戒儀」と「通經」を中心とし、「總彰佛體」「開智慧門」「顯示不思議法」「明諸法正性」「自然無礙解脫道」の五章から成り、その全體が「無生」の悟りに導く「方便」を説くものとして「大乘無生方便門」と名づけられた。

第二段階 (八世紀中葉)

その後、宏正の時代になると、各章がそれぞれ『大乘起信論』『法華經』『維摩經』『思益經』『華嚴經』に基づいて別個の方便を説くものと見做されるようになり(「五方便」)、各章の名稱も「總彰佛體。亦名離念門」「開智慧門。亦名不動門」「顯不思議門」「明諸法正性門」「了無異

門」に改められた。そして、この立場から本文の改編が行われ、全體の名稱も「大乘五方便」に改められた。

第三段階（八世紀後半）

宏正の弟子の時代になると、大乘戒への關心が減退して「開法」が行われなくなった。その結果、「大乘五方便」は、「授菩薩戒儀」としての役割を失い、単に「通經」の模範を提示するだけのテキストとなった。この性格の變化に伴って、以後、『通一切經要義集』『大乘五方便北宗』等の多くの異本を生み出すに至った。

というものである。そして、伊吹氏が『大乘五方便』の成立と變遷を次頁の圖表で示されている。

一方、黄青萍氏は「關於北宗禪的研究—五方便門寫本及其禪法」と題する論文において、まず敦煌から出現した北宗禪關係の文獻を、

- ① 弘忍—神秀—智達の《要決》寫本系統
- ② 弘忍—神秀—普寂—宏正—五方便門寫本群系統
- ③ 弘忍—神秀—降魔藏—寂滿—《了性句》系列《修心要論》連寫本系統
- ④ 弘忍—神秀—降魔藏—摩訶衍—《法性論》系列《修心要論》連寫本系統

など4種の系統に分類した上で、専らその②五方便門寫本群系統に論考を加えた結果、

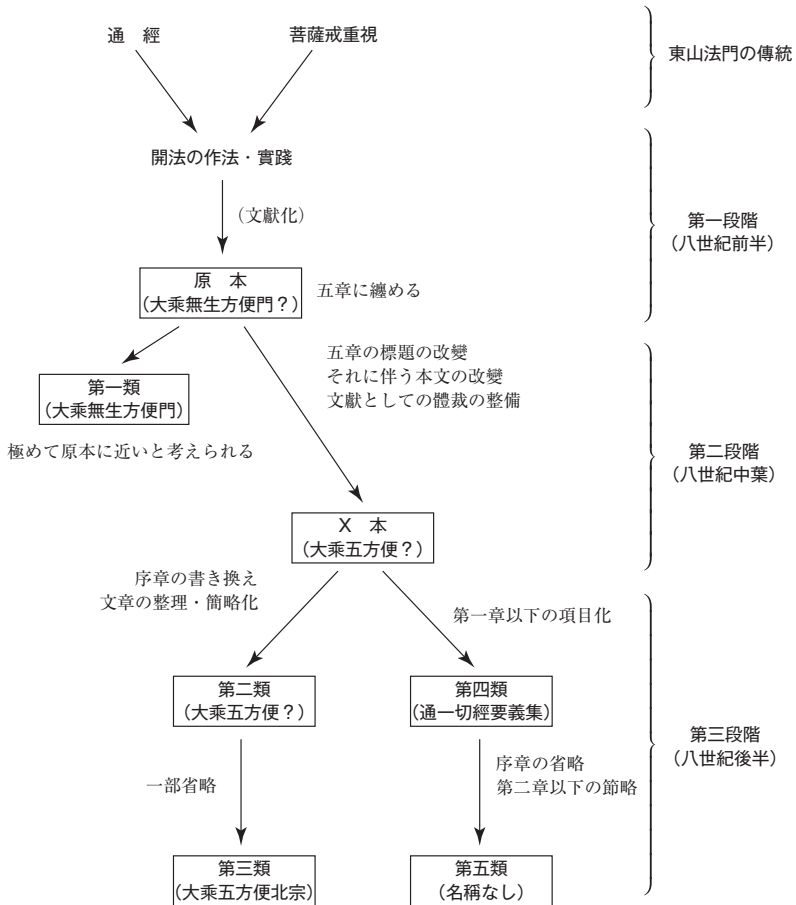
『大乘無生方便門』は普寂が晩年、開堂說法した記録であるのに對し、『大乘五方便北宗』はおそらく普寂の弟子である宏正による說法の記録であり、兩者には傳承の色彩が濃厚である。

一方、『通一切經要義集』をはじめとするほかの異本は、おそらく普寂系統に屬するもので、看心法と五方便門をその内容とする。しかも北宗禪の文獻では、その看心法に關する記録が最も明瞭である。

さらに、五方便門の中身は、一見すると、一から五にいたるような次第性に富んだ修行方法に見えるが、實はそうではない。五門はそれぞれ一論四經に基づいて説かれたものであるが、それは異なる經典を用いつつ異なる名相より異ならざる禪法を傳授せんとするもので、しかもいずれもその第一門「離心、離色、心色俱離」によって統御されるものである。五門はその1つ1つがいずれも他の四門に獨立した完全なもので、修行者がこれらのうちのどれに基づいても解脱しうる禪法思想である。

と結論づけられたのである。

《『大乘五方便』の成立と變化》



伊吹敦 「『大乘五方便』の成立と展開」 (『東洋學論叢』 37、2012、54 頁) より轉載

さて、S6980 以降のスタイン・コレクションに『大乘五方便』の異本 1 種が存在していることは、すでに『方・英藏目録』(269 頁)によって明らかにされている。それが S7961A である。方氏の著録によれば、S7961A は首尾ともに缺く横 11.2cm × 縦 28cm の残片で、1 行約 26 字で計 8 行の内容が残っており、およそ T85-1273b12 ~ 24 に相当するものであるという。

8、達摩禪師論²² (S7884 の1種)

『達摩禪師論』という題名を持つ敦煌禪宗文獻は、複数発見されている状況の中、²³ かつて奈良薬師寺長老の橋本凝胤氏が舊藏された敦煌本『達摩禪師論』(以下、橋本舊藏本)以外、長い間、他に異本の存在が全く見いだされず、発見された当初から現存唯一、しかも日本にしか保存されていないものとして學界の注目を集めてきたのである。

最初にこれを學界で紹介されたのが關口眞大氏である。すなわち、關口氏はその著『達摩大師の研究』(彰國社、1957→春秋社、1969)において「『達摩禪師論』(燉煌出土)と達摩大師」と題する章節を設け、橋本舊藏本の書誌學情報を紹介した上で、その構成と特色について、それを現在達摩の唯一の眞説とされる『二入四行論』と對比しつつ詳細な論究を展開し、橋本舊藏本に基づいてテキストの校訂(以下、關口本)を行われた。²⁴ 關口氏の紹介によれば、首部が缺けているため、その首題や撰號を知ることのできない橋本舊藏本は、「一紙の幅九寸二分長さ一尺三寸八分のもの六紙半の卷子である。一紙は十六乃至十八行、罫があって天地が無い。本文は百五行、總體で一千五百二字である。その内缺損や判讀不能の文字凡そ八字が含まれている」という。²⁵ また、關口氏は橋本舊藏本『達摩禪師論』の「最も惹目させられる」思想的特色の一つとして、「第一徐緩、第二唯淨、第三唯善」と呼ばれる三種安樂法門を取り上げられている。²⁶

長い間、待望された橋本舊藏本『達摩禪師論』の異本はついに S6980 以降のスタイン・コレクションからそのすがたを現したのである。すなわち、S7884 のことである。これを最初に著録した『方・英藏目録』によれば、S7884 は S7884A、S7884B と編目された2つの殘片からなるもので、S7884A は横 36cm × 縦 27cm の殘片に1行約 22 字でおよそ 20 行の内容が書寫されており、S7884B はそれに接續する横 1.8cm × 縦 10cm の殘片で、辛うじて1行7字が

22 『分類目録』では『達摩禪師論』の敦煌寫本として1種を紹介している(106～108頁)。すなわち、①橋本凝胤氏舊藏本の1種である。

23 本書のほか、全く同名の『天竺國菩提達摩禪師論』という敦煌禪宗文獻もあり、その詳細については、『分類目録』の該當部分(112～114頁)を参照されたい。

24 その詳細については、『分類目録』(106～108頁)を合わせて参照されたい。

25 關口眞大『達摩大師の研究』(彰國社、1957→春秋社、1969、49～50頁)。

26 關口前掲書、62～81頁。

残っているという。ただ、『方・英藏目録』の作成に際して、方氏は首尾ともに缺いた S7884 が橋本舊藏本『達摩禪師論』の異本であると気づかず、寫眞によって録文した上（以下、方本）、「修道論」という擬題を付されたのである。今回の調査に当たり、筆者が改めてその内容を精査し、これこそかつて關口眞大氏によって最初に紹介された橋本舊藏本『達摩禪師論』の異本であると特定したのである。この新出の S7884 は、上記の如く首尾ともに缺いている斷簡ではあるものの、幸いにして、その内容はまさに關口氏が「極めて獨特な法門」としてとらえた三種安樂法門に相當するものである。その重要性を鑑みて、S7884 の寫眞に基づきながら、關口本（該當部分のみ）、方本を参考にしてその録文を試みよう。

S7884A

前缺

哉。何以故、只由不解守本淨心、令□…□/
 起貪著、故火所燒。『法句經』云、□…□/
 無有休已。『法華經』云、堅著於五欲、□…□/
 緣、墜墮三惡道、輪廻六趣中、備受諸苦 [毒]。□…□/
 弊色聲香味觸也。若貪著生愛、即爲所燒。□…□/
 門、行者當學。一者、事中徐緩。二者、唯淨。三者、唯善。□…□/
 瞻視、言語、所作莫急、一切唯緩。故人云、欲速即不達。人□…□/
 急。第二唯淨者、身心安樂、常清淨。『經』言、樂心喜清淨、所 [作] □…□/
 外、常須清淨。第三唯善者、無嗔恨是善。□□ [嗔恨]、雖脩/
 種種功德、不名善人、不免墮於地獄被燒□…□/
 十四卷、釋提婆那問說偈言、何物煞安隱、□…□/
 一切善、何物煞而讚。佛答言、煞嗔心安隱、煞 [嗔] □□□。嗔□/
 毒之根、嗔滅一切善。煞嗔諸佛讚、煞嗔則無憂。菩薩思惟、我/
 今行慈悲、令衆生得安樂。嗔爲吞滅善、毒害一切善。我當云/
 何行此重罪。諸煩惱中、嗔爲最重。不善報中、嗔報□…□/
 『智度論』云、說偈雖復誦經禪、口中刀劍□…□/
 語罵人、即是刀劍。談說他人過、死入地獄□…□/
 猶未出。『經』云、自讚毀他、墮三惡道、不名出家。□…□者、/
 所謂出五欲家、若貪五欲家、不名出家。出家、出財色家。貪/
 著財色、不名出家。出家、出吾我家。若有吾我、不名出家。/

(160) 英藏敦煌文獻から發見された禪籍について (1) (程)

S7884B

□…□出□想顛倒家、若 /

後缺

(續く)

附記：

本稿は、「學校法人駒澤大學在外研究に關する規程」に基づき、平成 28 年度在外研究の成果報告の一部である。

最後に、在外研究に際し、受け入れ教員になっていただいた上海師範大學教授の方廣鋁先生に、また同期間中、頗る調査の便利を圖ってくださり、啓發的示唆を數多く賜った同じく上海師範大學副教授の定源（王招國）先生に、深謝を申し上げたい。

〈キーワード〉英藏敦煌遺書、敦煌禪宗文獻、S6980 以降